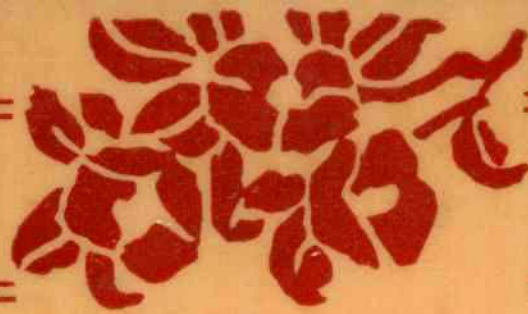




角川文庫

—3843—

幻の女

横溝正史



角川書店



昭和五十二年三月十日 初版発行
昭和五十三年七月三十日 七版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

まぼろし おんな
幻 の 女



著作者 横溝 正史

発行者 角川 春樹

印刷者 村沢 達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
一〇二番東京⑧一九五二〇八

株式会社 角川書店

電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

旭印刷・多摩文庫

0193-130444-0946(0)

女の幻

他二篇

横溝 正史



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

幻の女

五

カルメンの死

二三

猿と死美人

一七

解説

中島河太郎
二三

幻の女

黒ん坊アリ

日比谷のかどに立っている、グランド・ホテルの壮麗な表玄関。

秋風がプラタナスのしなびた落ち葉を、カラカラともてあそんでいる、その白い石だたみの上に、今しも一台の自動車はいってきて、とまったかと思うと、中からひらりと飛びおりたのは、さよう、としのころは十九か二十ぐらい、小柄で、抜けるように色の白い青年だった。

柔らかそうなビロードの冬帽子をスッポリとかぶり、近ごろ流行の裾すそのながい外套がいのとうをひきずるように着流して、眼には大きな青眼鏡をかけているのである。

「アリ、荷物を頼んだよ」

と、青年がうしろをふりむいて言う、

「おお」

と、妙な返事とともに、ゴソゴソと自動車の中から這はいだしたのは、これまた、青年とは正反對な、雲つくばかりの大男。あわててそばへよろうとした表玄関つきの玄関番も、びっくりして立ち止まったくらいである。

無理もない。この男ときたら、せいの高さは六尺有余、肩幅が衣紋竹えもんだけのように広くて、胸の筋

肉が隆々と盛りあがっているのである。太い猪首いのこが固いカラーにしめつけられて、まるで青竹の上にゴム風船をのつけたよう、おまけにこの男の色の黒さはどうだ、まるで鍋墨なべずみでもくつつけたように、黒光りに光っている顔の中で、二つの眼だけが西洋皿のように白く光っているのである。むろん日本人ではなからう。いま青年がアリと呼んだところをみると、ひょっとするとこの男インド人ではなからうか。

「アリ、荷物はいいね」

「おお」

まるで牛のうなるような声なのだ。

驚きのあまりキョトンとしている玄関番を尻目しりめにかけて、青年はホテルの中へはいっていくと、スタスタと大股おおまたにカウンターのほうへ近づいていった。そのうしろから例の大男が、大きなトラノクを二個、かるがると両手に提さげてついていくのである。

これが眼につかずにはいられない。ロビーにうろついていた数人の客が、思わず好奇にみちた眼を見はって、この異様な二人連れを迎えた。午後三時。——ホテルとしては一番閑散な時刻であつたのが、この二人連れにとっては、まだしも仕合わせだつたのである。

「部屋がありますか」

カウンターのそばへ近寄つた青年が、ゆうゆうとして尋ねた。女のように、甘い、柔らかい声だつた。

「はあ、あの——ございますことはございますが、どういふお部屋がよろしいので……」
うっかり大男のほうに氣をとられていた番頭が、ドギマギしながら答えるのを、青眼鏡の青年はさりげなく聞き流して、

「二つつづきの部屋がほしいのですがね、この男もいっしょに泊まるのですから」
と、色の黒い従者を顎でさしながら、青年はカウンターの上にひろげてあつた宿帳を引きよせた。

「はあ、ちょうどそういうお部屋がございます。しかし三階ですがいかがでしょうか」

「三階？」

と、青年は何気なくききかえしながら、手袋をはめたままの指で、宿帳をなでていたが、その指がふとページの上でとまると、

「おや、八重樫麗子？」

と、口の中でつぶやいて、

「きみ、この八重樫麗子というのは、近ごろアメリカから帰ってきた、ジャズの歌い手じゃありませんか」

「はあ、そうだそうですね。御存じですか」

「いや、知っているというわけじゃないが、向こうでは相当有名な女だそうだね。そう、あの人もこのホテルに泊まっているのだね。この二十三号室というのは何階ですか」

「はあ、お二階でございます」

「そう」

青年は軽く指で、ページの上をはじきながら、しばらく考えているふうであったが、

「どうだろう、その二階に空き部屋はないかしら。いや、別に八重樫さんがいるからというわけじゃないが、どうも三階は少し出入りに不便だからねえ」

この時、番頭がもう少し頭を働かしていたら、この青年のものごしにどことなく変なところがあるのに気がついたはずだった。カウンターのまえに立つと、いきなり宿帳を調べたり、そして八重樫麗子が二階に泊まっているときくと、急に二階の部屋にしてくれと言いつたり、そこに何かしら、容易ならぬ企み^{たくら}があるらしいことに気がつかねばならぬはずであったが、番頭は深く考えてみようともしせず、

「はあ、あのお二階で。——こうつと——」

と別の帳簿をバラバラくっていたが、

「あ、ちようどいいぐあい^たに、今朝ほどお発ちになったお客様がございました。二十八号室ですから、八重樫さんのお部屋とは相当はなれておりますが」

「いや、別に、八重樫さんに用事があるというわけじゃないから、それでもけっこう、じゃ、それへ案内してもらいましょうか」

「はあ、どうぞ」

青年は手袋をはめたままの手でペンを取りあげると、スラスラと名前をしるした。番頭が横眼でのぞいてみると、

神戸市北長狭通三丁目

無職 及川 隆哉

従者 ア リ

と、ある。番頭はなんとなく不安らしく額を曇らせたが、それでもすぐベルを鳴らしてボーイを呼んだ。

「二階の二十八号室へ御案内申し上げるんだよ」

それから、従者アリが提げている、二個の大トランクに眼をやると、いくらか安心したようにうなずいた。青年のほうではむしろそんなことには気がつかない。二十八号室というのに案内される、いきなり彼は、ボーイをとらえてこう尋ねたのである。

「きみ、二十三号室というのは、この廊下の並びかい？」

「はあ、その廊下を曲ってから、二つ目の部屋がさようでございます」

ボーイは窓のカーテンをひらいたり、椅子のクッションをなおしたり、通りいっぺんのサービスをしてしまうと、それでもう用事はすんだはずなのだが、それでもすぐ立ち去ろうとはしない

でなんとなくもじもじしながら立っている。チップにありつこうという、いちばんかんじんの用事が残っているからなのだ。

青年はそれと気がついていないのか、たばこに火をつけると、ゆっくりと煙を吐きながら、

「八重樫さんというのは、ひとりでこのホテルに泊まっているのかね」と尋ねた。よっぽど八重樫麗子のことか気になるらしいのだ。

「はあ、いいえ、あの、付き添いのかたが一人ついております」

「そう、そしてその付き添いの人、今いる？」

「つい今しがたお出かけになりました。なんでも横浜まで御用がございますそうで」

「横浜？」

及川隆哉おいかたがやは青眼鏡のおくでちょっと眼を光らせたが、すぐさりげない様子になって、

「横浜とすると、帰ってくるのに相当ひまがかかるわけだね。八重樫さんはいる？」

「はあ、おいでのはずでございます」

「だれかお客様でも来てる様子かね」

「いいえ、そういう模様はありませんでした」

「すると八重樫さんは今一人きりでいるわけだね。何をしているかしら」

「お風呂ふろじゃありませんか。さきほど、浴室のぐあいを見てさしあげましたから。でも、何か

御用がございますのでしたら、私がお使いにまいってもよろしゅうございますが」

チップにありつきたいものだから、ボーイのやつ、せいぜい愛嬌あいきょうをふりまくのである。

「いや、ありがとう、なんでもないんだよ。ああ、アリ、例のもの用意できてるだろうね」

「はい」

例によって牛のうなり声みたいな返事だ。及川青年は安心したようにボーイのほうに向きなおると、

「いや、御苦労さまでした。それでは、きみ、これを」

青年がポケットに手をつ突っ込んだので、てっきりチップにありつけると心得たボーイが、欣然きんぜんとしてまえへ進み出た時である。

廊下のドアに音もなく錠をおろした黒ん坊のアリが、つつつと蛇へびのように這はいよったかと思うと、いきなり、ボーイの体をうしろからガッキリと羽はがい締め。

「あ、何をするのです！」

驚いたボーイが身をもがいて、振りかえろうとするところを、いきなり大きな掌てが鼻と口をふさいだ。——ぬれたハンケチの甘酸っぱい匂においが、つーんと鼻から頭へぬけたからたまらない。

「ああ、——だれか来てえ、——人殺し——」

という言葉も口のうち、舌がもつれて、手足の動作が緩慢かんまんになって、眼の色がうわずってきたかと思うと、かわいそうにボーイのやつ、ぐったりと床の上に丸くなって倒れたのである。

怪青年

「ふふ、うまく行ったようだね」

この様子を、眉毛まゆげ一つ動かさずに見ていた怪青年の及川隆哉は、ボーイが倒れたのを見ると、口にくわえていたたばこをポイと投げすてて、にんまりと笑った。それからボーイのそばによつて、まぶた瞼を邪険に、ぐいとあげて見て、

「よし、この分なら大丈夫、二時間ぐらいは覚めやしない。それじゃ、アリ頼んだよ」

「おお」

怪青年は、つと身を起こすと、外套をぬぎながら、急ぎ足で隣室へはいっていく。あとに残った黒ん坊のアリ、ぐったりとしているボーイの体をだきおこしたから、どうするのかと見ていると、衣服をはぎだしたから妙だ。

上衣を脱がせて、ズボンを脱がせて、そいつを片手にぶら下げて、隣室との境まで行くと、

「おお」

と、言いながらドアをたたく。

「オーライ」

ドアが細目にひらいて、華奢きゃしゃな腕がその洋服をうけとった。しばらくして、

「帽子、帽子」

と、いう声。黒ん坊のアリが見回すと、格闘のはずみに、脱げてとんだのであろう、顎紐のついた赤い縁なし帽子がすみのほうにころがっている。そいつを拾って持っていったとやると、やがてドアが向こうがわからあいて、にやにや笑いながら姿を現わした怪青年、驚いたことには今はぎとった制服を身につけて、どこから見ても一分のすきもないボーイの身ごしらえなのである。

「ほほう」

と、黒ん坊のアリが眼を丸くして驚嘆するのを、尻目しりめにかけた怪青年。

「どうだ、似合う？」

と、左のかかとでくると一回転してみせた。似合うも似合わぬも、赤地に金ボタンの制服が、あつらえたようにピッタリと身にあって、粹いさな帽子をはすにかぶったところなど、どう見たってりっぱなボーイさんである。

「よし」

と、うなずいた及川青年、

「それじゃ、ひと足先に行っているからね。おまえは念のためにこのボーイをしばらくあげ、猿轡さるわをはめておいてからすぐ来ておくれ。ああ、ちょっと、廊下にだれもいやしないか」

黒ん坊のアリがそっとドアを開いて外をのぞいた。幸い、あたりに人影はなかった。閑散なホテルの中は、ちょうど古城のように、ひっそりと静まりかえっているのだ。

「じゃ、行ってくるよ」

と、さすがに緊張の色を眼に浮かべた及川青年、廊下へ出るとつつつと急ぎ足にその角を曲がって、ひいふう、とドアの数をかぞえながら立ちどまったのは二十三号室のまえ。——八重樫麗子の部屋なのである。

コツコツとドアをたたくと、

「だれ？」

と、ずっと奥のほうで声がして、

「珠子さんかい。鍵はかかっていないわよ」

しめた！ とばかりに怪青年。ドアを押して部屋の中へすべりこんだ。とつつきは玄関代わりのせまい部屋、その奥が麗子の居間兼寝室になっていて、さらにその向こうに浴室がついている。たぶん御入浴中でしょうといったボーイの言葉は間違っていないかった。

居間との境にかかっている厚ぼったいカーテンの向こうから、パチャパチャと湯を使う音がきこえるのである。

「珠子さん、どうだった、首尾は？ 横浜のほうはうまくいって？——おや、今ドアがひらいたような音がしたけれど、珠子さんじゃなかったのかしら」

「はあ、あの奥さま、私でございしますが」

「あら」